

# 透析患者が期待する透析医療

春木繁一

松江青葉クリニック

key words : 人工腎臓, 真の透析医, 世代交代, 医師の顔が見える

## 要 旨

透析という手段による「人工腎臓」の技術は、日本では、もう目一杯に進歩したのではないか。今後はこの医療では「人」が問われていく。

今後、透析医の世代交代が進む。「真の透析医の育成」は重要課題である。

患者の10年、20年、30年先を考えた透析医療が提供されることを期待したい。

## はじめに

私自身が今日まで透析医療で30年を超えて生きてくることができたことにまず深く「感謝」したい。「ありがたい」と思う。心からそう思う。

20世紀の日本で始まったばかりの透析医療に出会い、時代に恵まれたこと、太田和夫先生はじめ多くの先生方やスタッフに出会えたことが幸運であったと思う。

私の経験（体験）から言うと、透析で長期に生き残れることの秘けつは「感謝、ありがたいと思うこと」につきる。

## 1 死を否認して生きる

透析医療は「死をみんなで否認する」ことで成立してきた。これは今後も変わらない原則である。

もちろん高齢者や長期透析患者が増えて「ターミナル医療」の側面も色濃く出てきている。が、なにより

も「延命」がこの医療の核心であることは今までと変わらない。

透析という手段による「人工腎臓」の技術はもう目一杯に進歩してきたのではないか、と私自身個人的には考える。今後はこの医療では「人」の問題が問われていくように思う。

## 2 真の透析医がどれだけいるか？

まず、一番に「真の透析医の不足」問題がある。かつて、私は「臨牀透析」誌に比喩的に「透析室は無医地区」だと書いた<sup>1)</sup>。それを讀んだ故中川誠之輔先生が、「主治医が看護婦（当時は婦）にCTRだけを測定させて、X線写真を自分の目で読影していなくて、患者の肺癌がはっきりしてから、あらためて前の写真を見てみたら、はっきりとコインレジョンが存在したケース」をあげて、私の意見に同意、賛成された。「無医地区」とは透析室に物理的に医師がいる、いないの問題を言っているのではない。「その日の透析さえ無事にすめばいい」式の透析がただただ長く繰返されていくことには問題があることを意味している。

2002年6月「長期透析患者の心・からだ・人生」のメインテーマのもと、神戸で開催された（当番会長：坂井瑠実氏）第13回日本サイコネフロロジー研究会において、長期透析患者でかついろいろな職種で透析医療に従事しているスタッフがシンポジストとして登場した。

その中で、透析歴29年の臨床工学技士である近藤

宏二氏は「少なくともスタッフがしっかりしていれば、患者さんは1~2年はほとんど問題なく元気に過ごせると思う。片手間で透析をやっている先生の施設にいる患者さんと、一生懸命やっている先生の施設の患者さんとは、多分5年先、10年先に、やっぱり違いが出てくると思う」と自らの体験から述べた。

同じく、透析歴27年の栄養士の祖父江優子氏も、「長く透析をやっているから合併症が出て当たり前、という風な考え方で先生は接して欲しくない。10年が出てくる所を、15年、20年先に延ばすような努力もやっぱり必要じゃないか」と述べた。

これらは長い間そして今現在も、スタッフとして透析医療の現場で働き続けてなおかつご自身が透析医療を受けている方々の、正直な感想あるいは切実な気持ちである。彼らはこれまでに患者として、と同時に共に働くドクターとして、当然何人ものドクターを見てきている。ここでも、「専門の透析医の存在の重要性、大切さ」を強く指摘している。

さらに祖父江氏は、非常に簡単だが医療者の胸を刺す言葉を述べた。「お医者さんは初心に帰って、お医者さんの本当の初心の気持ちを忘れないでほしいです」と。

### 3 世代交代が進む

今後、透析医の世代交代が進む。いや、これはすでに現在進行形である。こうした時代にあって、多くの透析医たちが「安心してバトンタッチできる状況にあるか？」ということを私は問いたい。

第1世代、第2世代と同じ志を持った「でも、しかか透析医」ではない真の透析医の育成は今後の透析医療の「要（かなめ）」であると言っても過言ではない。真の透析医を育てる仕事に、明日から、いや今日から力を入れていただきたい。

患者の10年、20年、30年先のことを考えた「現時点での医療」、「合併症の予防」ができる医師の存在は非常に大切である。不幸にして、腎炎、ネフローゼなどで10歳台、20歳台、30歳台、40歳台で透析に導入されたとしても、その患者が20年はおろか30年、40年と生き続けることができる透析医療を確実に提供できる体制をしっかりと作っておくことが必要だと思う。

### おわりに

これから先の5年と言わず、数十年が30年前の私のキールやコイル時代の技術と同じ成績では医師の力はなかったことになる。

患者が安心して透析で「長生きできる」ことが引き続き可能であるようにと願う。「医師の顔が見える医療を」。これが実現して初めて「透析で生きる意味」を患者さんに問うことができるであろう。

### 文 献

- 1) 春木繁一：精神医学の立場からチーム医療としての透析医療を考える—透析看護を論じる前に。臨牀透析，1；179，1986。